

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

|                   |                                   |
|-------------------|-----------------------------------|
| 論題(和文)            | 豊かな文化遺産と変わらない社会 インド紀行を終えて         |
| Title(English)    |                                   |
| 著者(和文)            | 和田章                               |
| Authors(English)  | akira wada                        |
| 出典(和文)            | 鉄鋼技術, Vol. 21, No. 247, pp. 80-81 |
| Citation(English) | , Vol. 21, No. 247, pp. 80-81     |
| 発行日 / Pub. date   | 2008, 12                          |



# 豊かな文化遺産と変わらない社会 —インドの歴史と建築を巡って—

最終回  
連載 7

## インド紀行を終えて

和田 章（東京工業大学 教授 建築物理研究センター）



写真1 宗教はしばしば偉大な建造物を可能にする  
ビジャプール・ゴル・グンバズ(写真：川口 衛)

### 「封建時代の建築」

人は基本的にわがままである。人々には色々な欲望もある。漢字「私」のつくりの「ム」はそれだけでも「私」の意味があり、漢字「公」のかんむりの「ハ」には抑制するという意味があり、「ム」つまり私のわがままを「ハ」によって抑えて、「公」ができるという。公共社会は、多く集まる私々のわがままを抑制することによって秩序が保たれ、成り立つ。1歳、2歳の子供たちの笑顔を見て感じるように、人は生まれながらに素晴らしい優しさを持っている。これを上手に育て、社会全体に優しさが満ちあふれるようにしなければならない。お釈迦様、キリスト様、マホメット様などは、人々のもつ優しさを基本に、秩序ある生き方の体系をかたちづくり、宗教として広め

たのだと思う。しかし、宗教の力も背景に、王国時代、封建時代、石炭や石油をエネルギー源とした機械が生まれる前には、どの国にも良い意味の自由はなかった。

このような時代に設計され、献身的な努力の果てに建設された「建築」や「都市」は日本だけでなく、どの国に行っても美しい。国王や皇帝が素晴らしい施政者の場合、その規制のもとにつくられる建築や都市は美しくなるのかもしれない。宗教に支えられた建築文化が美しさを生んだのかも知れない。

### 「民主主義と建築」

先進国と呼ばれる多くの国々は、近代科学が発達し18世紀の産業革命後に工業が栄えるころ、封建時代が終わり、民主主義が定着し、これら

の国の人々は大きな自由を勝ち得た。日本も江戸時代、明治維新、大正・昭和を経て、第二次世界大戦後には、世界に負けない自由な国になった。しかし、今の日本は「ム」の自由の行過ぎた国のようにも感じる。一人ひとりの国民だけでなく、国の政を任される国会議員についても、あるべき国のかたち、国民全体の幸せを考えて行動しなければならないはずなのに、選挙のことが気になり、選挙区の人々のことを、第一に考えて行動している。ポピュリズムといわれ、大衆の動向に振り回される政治になってしまう。18世紀から20世紀にかけて、国によっては多くの犠牲の上に勝ち取った人々の自由であるから、さらに良いかたちにして行かねばならないが、今のかたちが最善な方法であるとは言えないように思う。

自由な国にはなったが、一部の素晴らしい建築や限られた美しいまちを除き、今の日本の何処にでもある普通の建築や、何処にでもあるまちなかに、世界に自慢できるものはほとんどないように感じる。「ム」に任せていて、素晴らしい建築や都市はできない。

ただ、学問を追究し、技術を高めているだけでは、建築やまちは美しくならない。建築構造に関するほとんどの教育と研究はジャングルジムのように柱と梁で作られる骨組構造のことばかりに重点を置いている。計算法、解析法それに実験も行われているが、美しく親しまれる建築を支える構造は如何にあるべきかなど





写真2 米国ノースウエスタン大学教授  
Z.バザント教授とSEWC2007会場にて  
（写真：川口 衛）

を議論している場面は非常に少ない。孔子は論語・為政の中で「四十にして惑わず」といわれたが、六十を過ぎてても悩みは絶えない。

### 「始めてのインド旅行」

2007年11月の旅行は初めてのインドであった。何度もインドに行かれ、当地に多くのご友人もおられる川口衛先生の引率で素晴らしい経験を得ることができた。しかし、国のカタチ、宗教、人々の生活、文化、建築、都市などに関わる基本的悩みはさらに深まってしまった。月刊『鉄構技術』の連載はこの第7回で終了である。インドの旅行で誰でも感じるこの悩みに、各回の執筆者が触れている。人は数十年の人生をそれぞれ生きていく、そのなかで何が幸せなのか、考えさせられる。一つの国は大きな車輪のようなものである。何百年、何千年とくるくる回り続けなくてはならない。インドのような貧富の差の大きな国もあるが、今の日本にも豊かな人、貧しい人、国の行く末を考えて頑張っている人、身の回りのことで精一杯の人もある。皆が平均的に豊かな国など作れないのかもしれない。

戦後すぐの小学校の記念写真を見て思う。私を含めてほとんどの子供たちがパッチの当たったズボンをはいているが、それでも幸せだった。もしかすると、今の子供たちより幸せだったかもしれない。雪解けのどろんこ道も大変だったが、目の前になすべき仕事が無数にあった時代が懐かしい。我々は安定した豊かさより、豊かさを求めて変化することに喜びを感じるのだと思う。

### 「自然と技術」

インドはアジアであるが、日本よりヨーロッパに近い。仏教の発祥地でもある。ヨーロッパで始まった近代科学、キリスト教の考えにあるらしいが、すべてのものには善と悪があり、この善悪はそれが置かれる状況にはよらずに、絶対的だそうだ。仏教的、もしくは日本的と言えるかもしれないが、ものに善と悪はなく、各人が行う一つひとつのことについて、後になって後悔することは悪であり、後悔することがなければ善と言える、東大寺の住職様らに伺った。自然現象を細かく分析して物事の成立ちを解明し、これを机上で目的にあうように組み立て、ものの動



写真3 農村は今も貧しいが、伝統の作業衣装には誇りがある  
ビジャプール郊外（写真：川口 衛）

きを調べ、合理的な人工物を設計し、自然のなかに作っていく、これが現在のヨーロッパ式の方法である。

日本の方法は、例えば建築構造に限ると、長年の棟梁の経験の積み重ねに頼り、必ずしもすべてが解明されていなくても、自然に逆らわず、一つひとつのものを後悔しないように作っていく方法である。建築ではないが、山谷の多い日本の山地に直線的に自動車道路を作ろうとする考えは、ヨーロッパ的である。大地震に襲われると、橋脚ごと道路は谷底に落ちてしまい、斜面を切り裂いてつくった道は山崩れによって跡形もなくなってしまう。縄文時代は1万年続いたと言われている。自然に馴染んで住み続けてきた日本人の考え方を、これからの学問、技術に生かしていかなければならない。

企画・監修：川口 衛（法政大学名誉教授 / 川口衛構造設計事務所）

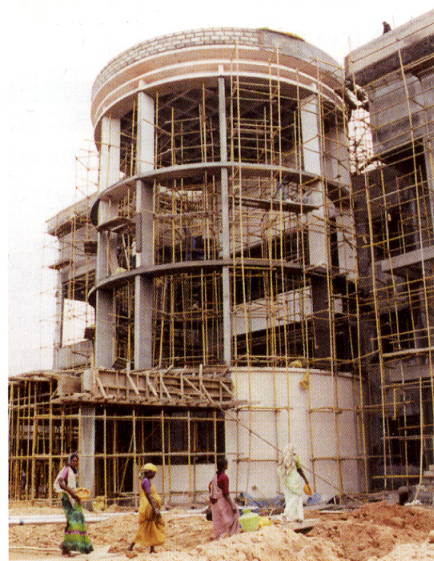


写真4 「現代建築」を作る女性労働者たち  
バンガロール市内（写真：川口 衛）